

No. 1004

桜の木の 下で

—千葉—

しょうゆの町で知られ、今も御用蔵などがそのまま残る静かな町、千葉県野田市。この野田市にある桜の名所、清水公園に、8日の日曜日、15万人の花見客が訪れました。咲きそろった2,000本あまりの桜の下で、子供達は、遊園地で飛び廻り、大人は花見酒に酔い、羽をのびます。歌に踊りに自慢の腕を競い、果ては、人目もはばからぬ余興に時を忘れる人々。子供までも忘れてしまって迷子も続出。満開の桜が散るまでの短い間、桜の木の下で、ゆく春を楽しんでいました。

日本の伝統

和 傘

栃木県、黒磯市に往む亀梨義一さん(62)は伝統の手作り、和傘一筋に半世紀を打込んだ生粋の職人である。東京から青森まで和傘専門店がウチ一軒。と亀梨さんが言うように今和傘作りは少なくなった。ほとんどが洋傘に転職、してしまったからだ。和傘作りは十数種の材料をそろえ、工程は百を数えるほどあり、しかも最近では真竹や和紙などの材料が入手困難になり製造を維持していくには大変むづかしい。そのうえ老夫婦でできるのは精一杯やっても一カ月200本足らずである。傘屋で、金持はいないそうである。それでも転職しなかったのは『トコトンやったる』という職人の意地だった今日では『からかささをさしたるに風のいたく吹きて、横ざまに雪をふきかくれば……』(枕草子)の情緒は味わうことはできない。今亀梨さんには後継者はいない。裏庭に咲いた傘の花を見つめる老人の表情には一まつの寂しさがある。日本の伝統がまた一つ消えようとしている。